

自分史を書く意義



評論家・ジャーナリスト

たちばな たかし
立花 隆

PROFILE ●

1940年長崎生まれ、2歳の時に父親の仕事の関係で中国・北京に転居。戦後に帰国。東京都立上野高等学校卒業、東京大学文学部仏文学科を卒業。文藝春秋社入社。文藝春秋社を退社後、文筆活動を行う。「田中角栄研究～その金脈と人脈」を発表。1995年に東京大学先端科学技術研究センター客員教授に就任、以降、教養学部非常勤講師、総合文化研究科特任教授、立教大学の21世紀社会デザイン研究科特任教授など、教育にも携わる。受賞多数。

会場：学士会館

現代史の中の自分史

二〇〇八年四月、立教大学では五〇歳以上のシニア層を対象に、本格的な学びの場である「立教セカンドステージ大学(RSSC)」を開講しました。書類選考と面接で入学できる一年間の課程で、宗教・芸術などの教養科目、コミュニケーション・デザインとビジネスに関する科目、老後設計に関する科目などを学びます。「ゼミ参加が必修」という点が大きな特徴で、合宿やフィールドワークも行なっています。

RSSCを設立した背景には、①団塊の世代が還暦を迎え、大量退職が始まった、②彼らの子供達(団塊ジュニア)が大学卒業年齢に達し、今後は少子化の影響で若者人口は減少する、という事情がありました。実際、このコースに学ぶ学生の多くは団塊の世代で、中には八〇代の学生もいます。第一期生の総代は、八〇代の短大生長の女性でした。

RSSC設立を準備していた頃、人生のセカンドステージをデザインするためには、自分のファーストステージをしっかりと見つけ直すことが必要だとの考えから、私は「自分史を書かせる授業を設置すべきだ」と提案しました。結局、私とその授業を担当することになりました。私がこの時行なった講義は、「二〇一三年、受講生の書いた自分史(抜粋)」と合わせて、『自分史の書き方』(講談社)として書籍化されました。

近年、中高年による自分史の自費出版が流行していますⁱ。還暦を迎えて自分の半生を振り返り、「自分とは何者だったのか」「自分が生きたのはどういう時代だったのか」について知りたい、書きたいとの思いが湧いてきて、自分史を書きたくなるようです。

六〇～七〇

年という歲月は、個人にとつただけでなく国家にとつても、今までの歩みを振り返り、時代をマクロに概括したくなる時間なのです。今年(二〇一五年)は戦後七〇年の節目の年であることもあり、昨年より、戦後の歩みを振り返る著作



講演中の様子

が数多く出版されています。自分史で面白いのは、「自分の一生は現代史の中でどう振り返ることができるか」という点です。私が立教大学で行なった講義のタイトルも、「現代史の中の自分史」でした。戦後七〇年の今年、自分史を現代史に重ね合わせて振り返る試みが益々盛んになるでしょう。

現代史を振り返る～戦後七〇年を経た日本の姿

日本の戦後七〇年は、歴史的に非常にユニークな時代でした。日本が七〇年間一度も戦争をしなかったのは、この時代しかありません。改憲を目指す安倍政権にしても、再び戦争ができる体制を作ることとは、近未来においては非常に難しく、今後も日本は独特の七〇年の延長に生きていると思います。

では、戦後七〇年で日本はどういう国家になったのでしょうか。「私たちは歴史の中でどこに在るのか」という問いは、非常に重要な問いです。現在(講演当時)発売中の雑誌『文藝春秋 SPECIAL二〇一五年冬号』には「日本最強論」という副題がついていて、様々な分野の論客が寄稿しています。この中に非常に面白い論考があるので紹介しますⁱⁱ(要約)。

二国(二)の豊かさについて、新しい考え方が欧米では浸透しつつある。④国民の福利厚生の水準(国民生活の

豊かさ)、⑧その水準を維持し高めていく能力(経済の持続性)、を基準にする考え方だ。

これを受けて二〇一二年、国連は新しい経済統計を発表した。この国連新統計では、従来のGDP成長率ではなく、①国民の頭脳力である人的資本、②ヒトが生産した資本、③国民の信頼関係である社会関係資本、④天然資本、という四つの資本に着目している。これら四資本のうち、数値化の難しい③社会関係資本を除く三資本の資本残高を計算したところ、日本は圧倒的に優れた数値で、「一人当たりの豊かさでは世界一」「国全体の豊かさではアメリカに次ぐ世界第二位」となった。特に高く評価されたのが、①人的資本(国民の教育水準や業務遂行能力)の水準の高さ、②生産した資本(企業設備や道路港湾などのインフラ設備)の水準の高さである」

終戦時、世界の憎まれっ子だった日本は、戦後七〇年を経て、世界一豊かな国となったのです。これは誇つて良い戦後日本のパフォーマンスです。

しかし一方、日本の未来を危ぶむ声も次々出ています。例えば、藤巻健史氏の新刊『日銀失墜、円暴落の危機』(幻冬舎 二〇一五年)です。著者は、一五年間のモルガン銀行勤務時代に三〇〇億円を稼いだした「伝説のディーラー」です。余談ですが実はその後、彼



立花隆氏

産業、政治という四つの軸を通じて、戦後七〇年を振り返る企画でした。

経済という軸では、「混乱期」「高度成長期」「安定成長への調整期」「バブルの生成と崩壊」「金融危機からデフレへ」という項目で時代区分し、歴史の流れを概説していました。

国際政治という軸では、「冷戦期」「雪解け期」「新冷戦期」「ポスト冷戦初期」「テロとの戦い」「中口の軍事活動の活発化」などの項目で時代区分し、各時代を振り返っていました。

はある相場であつたという間にその三〇〇億円を失うのですが、この本にはこれまでに明かさなかったその顛末が詳しく書かれているとても面白い一冊です。藤巻氏はこの本の中で半生を振り返り、長年の相場の乱高下を見てきた眼から、「今の日本経済は破綻寸前である」と警告しています。

日銀は二〇一四年一〇月、追加の金融緩和策を決定しました。実はこの時、日銀政策委員会でも議論は真つ二つに分かれ、決定は「五対四」という僅差でした。専門家の間でも意見が対立したのです。同時に日銀はこの時、国債買い入れ額をこれまでの五〇兆円から八〇兆円へほぼ倍増しました。これは日本で法律上禁じられている「国債の日銀買い入れ」です。現在、総理周辺もエコノミストも「日本経済は第三の矢によって復調する」と言っていますが、藤巻氏は「市場が金融政策の異常性に気付いたら、ハイパーインフレが起こる」と危惧しています。

自分史を書く意義「時代」と「未来」が見えてくる

話を戻します。自分史を書くとは、「自分史十歴史を書く」ということです。この時大切なのは、「時代を概括する眼」を持つことです。少し長くなりますが、日経新聞一月三日朝刊の「戦後七〇年回顧特集」を例に、説明しましょう。この特集は、経済、国際政治、

産業という軸では、戦後の日本経済を牽引した「電機」と「自動車」という二大産業に注目し、それぞれの歩みを説明していました。

政治という軸では、自民党政治を中心に据え、「絶頂」「落日」「復活」に時代区分し、検証していました。「絶頂」と「落日」の間に「派閥抗争と構造汚職の時代」があり、ロッキード事件が起きていました。この時代区分を見ると、「田中角栄は日本政治が生むべくして生んだ」ところが目瞭然でした。

このように、戦後七〇年を四つの軸について時代区分し、項目を順に追うと、現代史の変遷が簡単に見て取れます。これが、歴史の流れを大きく掴む「時代を概括する眼」です。自分史を書く時、通常、子ども時代から書き始めると思います。しかし、私は講義の中で、「家系や先祖のことから書こう」と指導しました。「自分の生まれる前の時代と社会にも目配りせよ」ということです。起きたことを時系列に記述する紀伝体の自分史は、面白くありません。自分の生まれる前にまで遡って、何十年にもわたる時間を概括すれば、「時代の背景に働いた力学」が見えてきます。これは自分史を実際に書いた受講生たちが皆、感じたことでした。こうして「時代を概括する眼」を持つようになれば、「未来」が見えてきます。さらに、「何が見えないか」も見えてきます。そうすると今度は、政府の見解や現代社

会の通念の中にあるおかしい部分が見えてきます。自分史を書く意義はまさにここにあります。その一例が前述の藤巻氏です。藤巻氏には金融の近未来が見え、アベノミクスと黒田日銀政策について語られないことが見えるということです。

自分史を書く際の留意点

私の講義では、自分史を書くための準備として、①自分史年表を作る、②各時代における人間関係クラスターマップを作る、という二つの作業を課しました。特に、①自分史年表作成にあたっては、「歴史の軸を何種類も設けなさい。自分の生きてきた時代の日本の出来事・世界の出来事などの客観的な歴史軸と、家族の出来事・影響を受けた人との交流などの私的な歴史軸を組み合わせて書きなさい」と指導しました。後は流れるままにどんな書かせました。歴史は常にダイナミックに動いています。自分史を書くとは、「自分史の軸が、歴史軸とどこでどう交わり、どう相互作用を起こしたか」を書くことです。

歴史の曲がり角には必ず、様々な人が様々な形で関与しています。例えば、学士会会員の中には一九六〇年の安保闘争の経験者が多数おられると思います。かく言う私も一九五九年の国会突入に参加しています。人は後世の歴史年表に載るようなことを実体験してい

特にドイツ文学では、主人公が様々な経験を通して内面的に成長していく過程を描く自分史文学は、「ビルドゥングスロマン」と呼ばれ、最大の文学分野を形成しています。この分野は日本語では何故か「教養小説」と訳されています。ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』、遍歴時代』、カロツサの『幼年時代』などが代表作です。英米文学やフランス文学においても、一見フィクションの体裁で書かれた作品の中に、「実は自分史なのでは？」と思われる作品が数多くあります。「自分とは何者なのか」という問いを様々な形で書くのが文学者です。「ある人がどういうプロセスを経て自己形成をしていったか」という観点から書かれた作品は、仮に「自分史」と銘打っていなくても、十分に自分史と言えるでしょう。

自分史を書く意義／歴史の証言を残す

受講生が提出した作品の中で、私が最も感心したのは、親子二代にわたる自分史です。その受講生の母親は若い頃に「将来、自分史を書こう」と思い立ち、書く材料として様々な生資料を保存し、生活の記録を書き留めていました。それらを、自分の子供（受講生）が自分史を書くというので、提供してくれました。

母親の資料には、あらゆる生活経費が銭単位で記録され、疎開先での生活が大変細かく記されていました。

たり、身近で目撃していたりします。ですから自分史を書く際には、「現代史の記録者」という視点を持つことが必要です。

立教大学での私の講義の受講生は四三人いました。その全員が自分史をきちんと書き上げました。彼らの多くが団塊の世代でしたので、彼らの自分史を読むうちに、団塊の世代の集団記録を読まれているような感覚に陥りました。それは大変面白い経験でした。

団塊の世代とは、学生時代に全共闘運動を経験し、就職後は日本の高度成長を担った世代です。しかし、実際に自分史を書かせてみると、一人一人の時代への関わり方は、年齢や職種によつて実に様々でした。受講生同志でも、「aさんとbさんは、あの時取引関係にあったA社とB社にお勤めだったのですね」と、当時の意外な関わりが判明するなど、歴史を振り返る醍醐味がありました。私自身も、「歴史は、その時代の社会を構成していた人々の自分史全体を読んで、初めて分かる。時として社会通念として知られている歴史とは相当違う歴史が見えてくる」と教えられました。

文学史における自分史

自分史は、歴史学だけでなく文学においても重要な役割を果たしています。自分史文学はこれまでに数多くの傑作を生んできました。

昭和一〇年代の日本の生活史、経済史として一級の価値があると思えました。私は以前から戦時中に関心を持ち調べを進めてきましたが、この作品を読んで戦争中の末端の庶民の生活がどんなものだったか、初めて具体的に理解できました。

受講生たちが提出した自分史は、この作品も含めて、講談社のウェブサイトに「立花隆の自分史倶楽部」ⁱⁱⁱにて、無料で読むことができます。実は前述の『自分史の書き方』でも、「この本に刺激を受けて自分史を書いた人がいたら、是非、発表の場としてこのウェブサイトを利用して欲しい」と呼びかけました。自分



懇親会の様子

史を書く人がどんどん増えて、やがては「日本庶民史集成」のようなものができたら良いと考えたからです。しかし、実際の反応は極めて少ない状況です。書くというのは大変なエネルギーを要するからでしょう。一冊の本を書き上げるのはなかなか難しくても、社会には「原・歴史資料」とでも呼ぶべきものがたくさん眠っています。自分史ブームを機に、そういう資料が次々掘り起こされることを期待しています。

二〇一五年一月八日、広島県原爆被害者団体協議会理事長の金子一士さんが亡くなりました。戦後七〇年が経過し、ヒロシマ、ナガサキだけでなく、戦場体験、空襲体験、引き揚げ体験、疎開体験などを含め、リアルな戦争体験を語る人が急速に日本社会からいなくなっています。第一次大戦については、二〇一一年五月、最後の従軍兵士が亡くなりました。二〇一二年二月には最後の軍属（食堂サービス係）も亡くなり、リアルな第一次世界大戦体験者はゼロとなりました。第一次大戦と第二次大戦の戦間期（約二〇年）を生きた方々は辛うじて存命ですが、やがて第二次世界大戦体験者も一人もいなくなるでしょう。最後の被爆者、最後の八月一五日体験者が亡くなる日もやがて来るでしょう。ヨーロッパでも遠くない将来、アウシュビッツの最後の生き残りが亡くなるでしょう。ほんの少し先の未来には、歴史の体験者がいなくなっ

てしまうのです。

先程、「自分史を書く上で、現代史は重要な参考資料である」と申しましたが、「現代史を書く上で、多くの人の自分史が最も重要な参考資料である」とも言えます。「全ての歴史は自分史の集合体」なのです。多くの人の自分史を総合すれば、戦後七〇年の「時代」全体が見え、より正確に日本社会の「未来」が見え、「何が見えないか」「何が今、隠されているか」も、よりはつきり見えてくるでしょう。

昭和史を生きてこられた方々の自分史が持つ意味は極めて大きいことなのです。戦争体験だけではありません。戦後復興、高度成長、安保闘争、東京オリンピック、連合赤軍、オウム事件など、歴史的民族的共通体験全てに言えることです。一つの歴史の証言として、是非、自分史を残してもらいたいと思います。

【注 釈】

i 現在、各地で「自分史サークル」が結成されている。二〇一四年九月には、朝日新聞社が自分史を自費出版するサービスを始めた。朝日新聞の記者経験者が取材し、自分史を代筆するコースや、原稿を記者経験者が読み、文章校正するコースがある。

ii 福島清彦「衝撃レポート これが日本の実力だ 資本 国連調査で世界一の豊かや」

iii <http://book-sp.kodansha.co.jp/topics/jibunshi/>。受講生の自分史は、本人の公開許可を得たもののみ公開されている。